

ピラトとヘロデの前のイエス

ルカ福音書23:1-12
(新改訳2017訳)

- 23:1 集まっていた彼ら全員は立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。
- 23:2 そしてイエスを訴え始めて、こう言った。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」
- 23:3 そこでピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えられた。「あなたがそう言っています。」
- 23:4 ピラトは祭司長たちや群衆に、「この人には、訴える理由が何も見つからない」と言った。
- 23:5 しかし彼らは、「この者は、ガリラヤから始めてここまで、ユダヤ全土で教えながら民衆を扇動しているのです」と言い張った。
- 23:6 それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、
- 23:7 ヘロデの支配下にあると分かると、イエスをヘロデのところへ送った。ヘロデもそのころ、エルサレムにいたのである。
- 23:8 ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思ひ、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。
- 23:9 それで、いろいろと質問したが、イエスは何もお答えにならなかった。
- 23:10 祭司長たちと律法学者たちはその場において、イエスを激しく訴えていた。
- 23:11 ヘロデもまた、自分の兵士たちと一緒にイエスを侮辱したり、からかったりしてから、はでな衣を着せてピラトに送り返した。
- 23:12 この日、ヘロデとピラトは親しくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

【祈りながら考えよう】

- (1) サンヘドリンが、イエスをローマ総督に訴えた3つの罪は何ですか。
- (2) イエスを訴えた理由が何も見つからなかったのに、なぜピラトは釈放しなかったのですか。
- (3) ヘロデの質問に、主イエスはなぜお答えにならなかったのですか。

【解説】

(1) でっち上げの3つの罪で訴え

《集まっていた彼ら全員は立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そしてイエスを訴え始めて、こう言った。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」》

主イエスを断罪したいと思っていた人たちは、夜通しの裁判で、主イエスを死刑に当たるとして一応断罪した。それは瀆神罪(神を冒瀆する罪)である。

しかし、彼らには死刑執行の権限が与えられていないので、どうしてもローマの総督ピラトに訴え、彼に処刑してもらう以外にない。

ローマの総督に訴えるには、瀆神罪では都合が悪いので、彼らは急に3つの罪状を作り上げて訴えた。

《この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました》

ユダヤ教の指導者たちはまず、イエスが国民を惑わした扇動の罪、第2に、税金をカイザルに納めることを禁じたという法律違反の罪、最後に、自分こそ王キリストだと宣言したローマ皇帝に対する反逆罪の3つである。



総督ピラトにイエスを訴えるユダヤ教指導者人たち

(2) 訴える理由が何も見つからない

《そこでピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えられた。「あなたがそう言っています。」ピラトは祭司長たちや群衆に、「この人には、訴える理由が何も見つからない」と言った。

しかし彼らは、「この者は、ガリラヤから始めてここまで、ユダヤ全土で教えながら民衆を扇動しているのです」と言い張った。それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、ヘロデの支配下にあると分かると、

イエスをヘロデのところへ送った。ヘロデもそのころ、エルサレムにいたのである。》

①ピラトとはどういう人物か

ヘロデ大王が死んだ後、その後を継いだアケラオが悪政のため排斥されると、ユダの地はローマの総督による直轄統治がされるようになった。ピラトはその5代目の総督で、紀元26-36年の間、統治していた。残忍なことで有名であった。ピラトは主イエスを訴えたユダヤ教当局者の手前、主イエスにこう質問した。「あなたはユダヤ人の王なのか」それに対して主イエスは、ただ「あなたがそう言っています」(It is as you say / NKJV)と答えておられる。

②訴える理由が何も見つからない

ピラトは主イエスを訴えたユダヤ教当局者の意図がねたみであることを見抜いており(マタイ27:18、マルコ15:10、ヨハネ11:48)、イエスの主張はローマ帝国にとって何の脅威でもないと判断した。自らイエスに問いかけた後(ヨハネ18:33-38)、ピラトは《祭司長たち》や群衆に向かって、「イエスには《訴える理由が何も見つからない》」と言った。

それならば、もうこれ以上縛っておく理由がないわけだから、釈放すればよいはずなのに、群衆の声に押し切られてしまった。祭司長たちや群衆はこう叫んだ。

《この者は、ガリラヤから始めてここまで、ユダヤ全土で教えながら民衆を扇動しているのです》

ピラトはユダヤ人を恐れていた。ユダヤ人が皇帝に直訴をすれば、自分が罷免されるということも知っていた。そこで、彼は主イエスがガリラヤの出身であることが分かると、これで逃げ道が見つかったと思った。

ガリラヤは《ヘロデの支配下》にあったので、イエスを《ヘロデ》に引き渡すことによって、自分はこの件にこれ以上かかわるまいと思ったのである。ヘロデは過越の祭りで、ちょうど《そのころ》、エルサレム滞在中だったのを知っていたので、ヘロデの所へイエスを送り届けて、責任逃れをしようとした。

③罪のないお方が私たちの罪を背負う処刑

この優柔不断な為政者を描きながら、ルカはイエスに対して彼が無罪であると宣言したことに注目している。主イエスは無罪のまま十字架にかけられた。神の御前において罪のないお方であったが、この世の法廷においても罪のないお方であることが確認された。つまり、罪のないお方が十字架上で処刑されたことになる。それは、私たちの罪を背負われての処刑であった。

(3) イエスの行うしるしを見たい

《ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思ひ、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと質問したが、イエスは何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちはその場において、イエスを激しく訴えていた。ヘロデもまた、自分の兵士たちと一緒にイエスを侮辱したり、からかったりしてから、はでな衣を着せてピラトに送り返した。》

①ヘロデはどういう人物か

主イエスが送り届けられて来たのを見たヘロデは非常に喜んだ。主イエスのことについては以前から聞いていたので、一度会ってみたいと思っていたのは、興味半分というところからであった。

このガリラヤの国主ヘロデというのは、ヘロデ大王の息子の一人で、ヘロデ・アンテパスのこと。

彼はガリラヤとペレヤの国主であった。彼は最初ナバテヤ王国のアレタ王の娘と結婚していた。

その後離婚し、兄のヘロデ・ピリポの妻ヘロデヤを奪うようにして結婚した。彼はそれを悪であると指摘したバプテスマのヨハネを投獄し、後にヘロデヤのそそのかしで彼を殺してしまった。このような俗物のヘロデのことを、主イエスは「狐」(悪賢い動物の意)と呼んでおられる。

②何を聞いてもお答えにならない

ヘロデが何を聞いても、主イエスは一言もお答えにならなかった。ヘロデは真剣さも聞く耳も持ち合わせていなかったため、イエスから何も聞くことができなかったのである。イエスに対してそうした態度をとる者は、昔も今もいる。神のこばを聞こうとする心の耳を持たない者には、神からのメッセージは無言というさばきの形で返ってくる。

それに腹を立てたヘロデは、自分に仕える兵士たちと一緒に、主イエスを侮辱したり、からかったりしたが、主イエスを断罪することはできなかった。そして、《はでな衣》を着せてピラトに送り返すことだけだと考えた。

主イエスが何も言っておられない時、しばしば私たちもそれを勘違いすることがある。答えて下さらないのだと思ひ込んだりしないとも限らない。祈りにおいて、そのように勝手に考えてしまうことがある。

しかし、主イエスが何も言われないのは、それに答えることができないのではない。そこにメッセージがあることを知らなければならぬ。答えられないこと自身がメッセージなのである。私たちの願いや思いが必ずしも正しくないことを示すシグナルかもしれない。主は沈黙されることによって、そこで立ち止まって考えるようにと言っておられる。

(4) 敵対者同士が友好的になる

《この日、ヘロデとピラトは親しくなった。それまでは互いに敵対していたのである。》

それまで《ヘロデ》と《ピラト》は互いに《敵対していた》が、この時互いに友好的になった。彼らは主イエスに敵対するという点では味方同士だったので、協力したのである。



イエスに、はでな衣を着せるピラト